

二〇〇五年七月三日（夕拝）

すべての生き物を支配せよ（一）

創世記一章二六節～三一節

創世記一章二八節には、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。」

と記されています。ここに記されている、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という造り主である神さまの祝福の御言葉は一般に「文化命令」として知られているものです。この造り主である神さまの命令は、大きく分けると、前半の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

という命令と、後半の、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令の二つに分けることができます。

これまで前半の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

という命令についてお話ししました。今日は、後半の、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令についてお話しします。

この、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令は、神のかたちに造られている人間が、神さまがお造りになったすべての生き物を支配することを命じるものです。

しばしば、この命令に対しては、その前の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

という命令とともにですが、人間が自分たちのために自然を征服し、生き物たちを利用することを許しているもので、環境破壊や、種の絶滅を引き起こす源

となつているというような非難がなされることがあります。

しかし、このような非難は、この神さまの命令に対する誤解に基づいています。実際に、このような批判をして、だから東洋的な多神教的な考え方がよいのだと主張する方々がおられますが、問題はそんなに簡単なものではありません。東洋的で多神教的な発想をもっている社会でも、いわゆる物質文明の拡大とともに、環境破壊は恐るべき速度で進んできましたし、今も進んでいます。このような問題の根っ子には、人間が造り主である神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまつていているという、人間の罪があります。神さまがお造りになつたこの世界を自分たちの欲望のままに利用してこの世界の環境を破壊するようになつたのも、それによって、生き物たちの絶滅が引き起こされたのも、人間の罪の自己中心性が生み出したものです。

この問題については、「ここではこれ以上触れることはできません。ここでは、海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という造り主である神さまの命令の意味を考えることによって、この命令に対する誤解を解くこととなります。

*

この造り主である神さまの命令の意味を考えるうえで大切なことは、これまで繰り返しお話ししてきたことです。この命令は神のかたちに造られている人間に向かつて語りかけられており、人間はこの命令を聞いているということです。それは、前半の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

という命令の御言葉に支えられて、人が最初の男女から始まつてついには地を満たすに至るまでの歴史をとおして、子々孫々受け継がれ覚えられていくべき命令です。

この意味で、地を従えることも、すべての生き物を支配することも、神さまから委ねられた使命として、委ねてくださった神さまのみこころにそつて果たされるべきものです。そして、それは人が造り主である神さまに対して罪を犯し、御前に墮落してしまう前には、人にとって当然のことであり、もっとも自然なことでした。

また、この、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令は一章二八節に記されていますが、これに先だって二二節には、

神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」

と記されています。造り主である神さまは、最初にいのちあるものをお造りになった時に、水にすむ生き物や地にすむ生き物たちがそれぞれの生息する所で増え広がるようにと祝福してくださっておられます。すでにお話ししましたように、二二節に記されている造り主である神さまの祝福は、二四節、二五節に記されている生き物たちにも及んでいると考えられます。

このように、造り主である神さまは、神のかたちに造られている人間を祝福してくださる前に、すでに、あらゆる生き物たちを祝福してくださっています。そして、その上で、二八節において、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令が、造り主である神さまの祝福として、神のかたちに造られている人間に与えられているのです。ですから、人間は、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

という命令を受けていますが、地を満たすようになるのは人間だけではありません。すでに祝福を受けている生き物たちも、地に増え広がっていくことになっています。むしろ、この点では、人間の方が「新参者」なのです。

さらに、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令は、造り主である神さまの祝福を受けている生き物たちを支配することを命ずるものです。

これらのことから、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という人に委ねられている使命は、神さまが生き物たちを祝福してくださっていることと深く関わっていると考えることができます。

すでに神のかたちのことを取り上げたときにお話ししましたように、神のかたちに造られている人間は、神さまがお造りになったこの世界に置かれた神のかたちとして、神さまを代表しているだけでなく、神さまを現しあかする位置にあります。愛といつくしみに満ちておられる神さまを、この神さまがお造

りになった世界であかしする立場にあるのです。そのような立場にある人間に、
海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という使命が委ねられました。そして、その生き物たちはすでに、それぞれの
生息する所において増え広がるべきものとして、神さまの祝福を受けています。
ということとは、神のかたちに造られている人間が「海の魚、空の鳥、地をはう
すべての生き物を支配」するということは、神さまが与えてくださったという祝
福が、これらの生き物たちの間に実現することに奉仕することを意味している
と考えられます。

*

以上が、この命令が与えられた文脈から考えられることです。次に、この命
令そのものを見てみましょう。

ここで、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

と言われているときの、「支配せよ」と訳されている言葉はリーダーです。こ
の言葉は、ヨエル書三章一三節で酒ぶねを「踏む」という意味で用いられてい
る以外は、「支配する」、「治める」を意味しています。同じように「支配す
る」ことを表す言葉であるマーシャルが人間などの支配とともに神さまの支配
をも表すのに対して、リーダーは人間の支配を表します（T W O T、リーダー
の項）。ただし、詩篇七二篇八節や一一〇篇二節などでは、メシヤの支配のこ
とがこのリーダーという言葉で表されています。このうち七二篇八節は後ほど
取り上げます。

このリーダーという言葉は、基本的に「支配する」、「治める」ということ
を意味していますが、これと関連して、この言葉が用いられているいくつかの
箇所を見てみましょう。

列王記第一・九章二三節には、

ソロモンの工事を監督する者の長は五百五十人であって、工事に携わる民
を指揮していた。

と記されています。

ここで「ソロモンの工事」と言われているのは、九章一節、二節に、

ソロモンが、主の宮と王宮、およびソロモンが造りたいと望んでいたすべ
てのものを完成したとき、主は、かつてギブオンで彼に現われたときのよ
うに、ソロモンに再び現われた。

と記されていますように、「主の宮と王宮、およびソロモンが造りたいと望んでいたすべてのもの」を建設した工事のことです。二三節で「工事に携わる民を指揮していた」と言われているときの「指揮していた」ということがこのラーダーという言葉で表されています。

これと同じことは、この記事と並行している歴代誌第二・八章一〇節に、

また、ソロモン王に属する者で、監督をする者の長は二百五十人であつて、民を指揮していた。

と記されていることにも見られます。

これは「主の宮」の建設という目的に向かつて「工事に携わる民」を指揮し導くことを表しています。このように、人々を一定の目的に向かつて導いていくことは、「支配する」こと、「治める」ことの大切な一面です。

*

「支配する」こと、「治める」ことがどのようなことであるかを示すもう一つの箇所としてエゼキエル書三四章一節〜六節を見てみましょう。そこには、次のような主のことばが私にあつた。「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かつて預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のあるものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえつて力ずくと暴力で彼らを支配した。彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。わたしの羊はすべての山々やすべての高い丘をさまよい、わたしの羊は地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。

と記されています。

二節で、

人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かつて預言せよ。

と言われているときの「イスラエルの牧者たち」は、ダビデの子孫として生れた王たちを中心とする、イスラエルの指導者たちのことです。民の指導者を「牧者」にたとえることは旧約聖書だけに見られることではなく、古代オリエントの文化の中で広く見られることで、古くはシュメールの文書においても見られると言われています。そして、そのように「牧者」にたとえられる指導者

たちは、「神」（「神々」）によつて立てられていると理解されていました。同じ二節で、

牧者は羊を養わなければならぬのではないか。

と言われていますように、そのように「牧者」にたとえられる指導者たちは、「羊」にたとえられている民を養わなければならぬ立場にあります。

牧者は羊を養わなければならないのではないか。

という言い方は、そのことを「イスラエルの牧者たち」もわきまえていることを示しています。ところが三節には、「イスラエルの牧者たち」のことが、

あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。

と記されています。「イスラエルの牧者たち」は「羊」を養うどころか、自分たちを肥やすために「羊」を犠牲にしているのです。これを受けて四節では、

弱った羊を強めず、病気のをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえつて力ずくと暴力で彼らを支配した。

と言われています。前半の、

弱った羊を強めず、病気のをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、

という言葉は、なすべきことをなさない罪、すなわち「不作為の罪」を記しています。そして、後半の、

かえつて力ずくと暴力で彼らを支配した。

という言葉はなしてはいけないことをなすという罪、すなわち「作為の罪」を記しています。

この三節と四節を一つの告発としてみますと、三節前半で、

あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふる

と言われていることは作為の罪です。そして、後半で、

羊を養わない

と言われていることは不作為の罪です。作為の罪をAとし、不作為の罪をBとしますと、三節と四節は、A・B・B・Aというキアスムスで記されていることとなります。

そして、四節後半で、

かえつて力ずくと暴力で彼らを支配した。

と言われているときの「支配した」ということが、リーダーという言葉で表されています。もちろん、この場合には、本来の、主のみこころにしたがって支配することから外れてしまっていることが示されています。それで、「力なくと暴力で」支配することは、支配権を委ねてくださった主のみこころに反することであるのです。

*

契約の神である主のみこころにしたがって民を支配することは、ダビデに与えられた契約において約束されているダビデの子である贖い主によって実現します。そのことは、同じエゼキエル書三四章の二三節、二四節に、

わたしは、彼らを牧するひとりの牧者、わたしのしのべダビデを起こす。

彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。主であるわたしが彼らの神となり、

わたしのしもべダビデはあなたがたの間で君主となる。主であるわたしがこう告げる。

と記されていることに示されています。

このダビデの子として来られる贖い主の支配を記していると考えられる詩篇七十二篇一節〜八節には、

神よ。あなたの公正を王に、

あなたの義を王の子に授けてください。

彼があなたの民を義をもって、

あなたの、悩む者たちを

公正をもつてさばきますように。

山々、丘々は義によつて、

民に平和をもたらしますように。

彼が民の悩む者たちを弁護し、

貧しい者の子らを救い、

しいたげる者どもを、打ち砕きますように。

彼らが、日と月の続くかぎり、代々にわたって、

あなたを恐れますように。

彼は牧草地に降る雨のように、

地を潤す夕立のように下つて来る。

彼の代に正しい者が栄え、

月のなくなるときまで、

豊かな平和がありますように。

彼は海から海に至るまで、

また、川から地の果て果てに至るまで

統べ治めますように。

と記されています。

この詩篇はダビデに約束された永遠の王座に着座するメシヤの支配のことを、理想的な王の支配を願い求める形で表現している「メシヤ詩篇」であると考えられます。

二節～四節において、

彼があなたの民を義をもって、

あなたの、悩む者たちを

公正をもってさばきますように。

山々、丘々は義によって、

民に平和をもたらしますように。

彼が民の悩む者たちを弁護し、

貧しい者の子らを救い、

しいたげる者どもを、打ち砕きますように。

と書かれているのは、メシヤの支配がどのようなものであるかを示しています。

それは義と公正をもって虐げられた者たちのためにさばきをなし、悩む者、貧しい者たちを守ることに現れてきます。

五節～七節において、

彼らが、日と月の続くかぎり、代々にわたって、

あなたを恐れますように。

彼は牧草地に降る雨のように、

地を潤す夕立のように下って来る。

彼の代に正しい者が栄え、

月のなくなるときまで、

豊かな平和がありますように。

と言われているのは、その支配が永遠のものであることを示しています。そして、八節において、

彼は海から海に至るまで、

また、川から地の果て果てに至るまで

「統べ治めますように。」

と言われているのは、その支配があらゆる領域に及ぶ普遍的なものであることを示しています。この八節で、

「統べ治めますように。」

と言われていることが、リーダーで表されています。

*

これらのことから分かりますように、支配権を委ねてくださった主のみこころにしたがって支配することは、自分に委ねられた人々を養い、その行くべき道に導くこと、また、義と公正をもって支配し、虐げられている人々を救い、貧しい人々を守ることに現れてきます。これは、自分に委ねられている人々やものを搾取して、自分を肥やすことと真つ向から対立します。

先ほど引用しましたエゼキエル書三四章三節、四節には、

あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力なくと暴力で彼らを支配した。

と記されています。これは、まさに人と生き物の関係をたとえとして用いています。この神である主の告発の御言葉にそって言いますと、造り主である神さまが委ねてくださった、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という命令は、「海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物」を養うことであり、弱ったものを強め、病気のものをややし、傷ついたものを包み、迷いでたものを連れ戻すことです。決して「力なくと暴力で彼らを支配」することを許しているのではないのです。